

見知らぬ誰かとなつながら合う

— 《教材分析》竹下文子『野原のシーソー』（小学校二年生） —

白 瀬 浩 司

九州女子大学人間科学部人間発達学科
北九州市八幡西区自由ヶ丘二一（〒八〇七一八五六）

（二〇一四年一月二三日受付、二〇一四年二月一八日受理）

序

見知らぬ者同士が、たまたま出会い、時間と空間（あるいは何かの道具）を共有することで、やがて既知の間柄となっていく。

別れがそうであるように、新たな出会いもまた、自身を取り巻く関係性の組み替えを迫られる契機の一つだと言えよう。私たちは、新たな知己とのそれを築くにあたり、時に意図的に、時に無自覚なまま、互いの位置取りや距離感を保ちつつ、心地よい均衡を成立させていく。あたかも子ども時代に興じたシーソー遊びのように。だからこそ、その均衡が崩れるときというのは、善きにつけ悪しきにつけ、自他の関係性に更なる変化をもたらす大きなきっかけでもあるわけだ。

本稿では、『野原のシーソー』を教材分析の事例として取り上げる。この作品は、絵本『びいすけとぶうすけのおはなし』¹に収載された八篇中の一編であり、平成17年度版の小学校国語科の

教科書に教材として採用されていた。

第一章では本作品の梗概と教材としてどのように扱うことが求められていたのかを確認する。その上で、第二章では児童たちに本作品を音読させる際に留意すべき作品の表現構造について指摘していく。さらに、第三章では物語内容の読解に関わる作品構造について論じることとなる。

ところで、絵本の標題にある〈びいすけ〉と〈ぶうすけ〉というのが、主人公である猪の子どもの名前だ。同絵本中の他の一篇『ぶんぶんの日』で、彼らは次のように描かれる。

○ たんじょう日がおんなじ。背の高さもおんなじ。ふとりぐあいもおんなじ。きている服もおんなじ。だから、友だちのきつねの子や、りすの子だつて、「あれ？ どっちだつて？」っていうくらいです。

○ びいすけとぶうすけは、目がさめるのもいっしょ。おなかやすくのもいっしょ。ねむくなるのもいっしょ。もちろんあ

そぶのも、いつもいっしょです。

○ 走るはやさも、力つよさも、だいたいおんなじぐらいだから、かけっこしたって、すもうをとったって、なかなか勝負が付きません。

双子ゆえ、何から何まで極めて相似しているという。そんな彼らが両端に跨がるのであれば、実に小気味よくテンポのあるシーソー遊びができるはずだ。ところが、些細な理由でふたりが喧嘩してしまった日のこと、

ぴいすけは、ひとりで野原にいきました。ひとりでシーソーにのりました。でも、むこうがわにだれかのつてくれないと、シーソーはうごきません。

という描写がなされている。既に触れたごとく、シーソー遊びは相手との均衡を取りつつ行うものである。ただし同時に、そしてまた当然ながら、相手がいなければ成立しえない遊びであることも忘れてはなるまい。

一、作品梗概と、教材としての扱われ方

一・一 『野原のシーソー』梗概

本作品を便宜的に五つの場面に分けてみた。短い作品ではあるが、まずは場面の展開を追うかたちで梗概をまとめておこう。

ある日、猪の双子ぴいすけ・ぶうすけの父親が、山から沢山の木を運んでくる。子どもたちの問いかけに、「あたらしい倉庫を

つくるんだよ。いろんなものをしまっておけるようにね」と応じた彼は、へしゅこしゅこ、のこぎりできって、とんとん、くぎをうって)、やがて立派な倉庫を完成させた「場面①」。

一本だけ木が余ったので、父猪はふと思いついて(家のうらの野原)にシーソーを作ることにした。ぴいすけとぶうすけは大喜びで、(きっこん ぱったん きっこん ぱったん)と、(かわりばんこに、あがったり、さがったり、あがったり、さがったり)のシーソー遊びに興じる「場面②」。

母猪に呼ばれ、夕食のため双子が帰宅すると、たんぼぼの葉陰から(うらやましくて、ずっとみていた)五匹の野鼠の子どもがシーソーに駆け上り、動かそうとする。ところが、(いくら力を出しても、とんだりはねたりしても)シーソーはびくともしないので、がっかりしてしまう「場面③」。

そのとき、蝶と蜜蜂と天道虫(てんどうむし)が参加し、さらに蜥蜴(としかげ)と尺取虫と蝸牛(かたつむり)、蟻たちが加わる。すると、(きっこん)。シーソーは(ゆっくり)ではあるものの、動き始めた。「もう一回」の掛け声とともに(はったん)。みんなは、歓喜の声をあげた「場面④」。

春の野原で(小さなおきやくさん)を大勢乗せたシーソーは(きっこん ぱったん きっこん ぱったん)と(へのんびりのん びり)動き続けたのである「場面⑤」。

一・二 教材としての扱われ方

現行教科書（平成23年度版）や新教科書（平成27年度版）には採用されていないのだが、平成17年度版の『新編 新しい国語』二年・上（東京書籍）では、二篇の詩「おがわの はる」（青戸かいち）、「たけのこ ぐん」（武鹿悦子）とともに、本作品が「たのしく声に出して読もう」という単元に位置づけられていた。そして、国語科授業としての学習目標、学習活動、評価の観点は次の通りである。

【学習目標】

◎ 場面の様子や人物の気持ちを想像しながら音読する。

【学習活動】（全12時間配当）

① 教材文を通読し、学習の見通しを持つ。（2時間）

② 「てびき」を参考にして、はっきりとした発音・発声ができるように練習をする。（2時間）

③ 「のはらのシーソー」や二編の詩を読んで様子を想像する。（6時間）

④ 物語の好きな場面や詩を選び、様子が伝わるように読み方を工夫する。（1時間）

⑤ 物語の好きな場面や詩を声に出して読み、感想を伝え合う。（1時間）

【評価の観点】

「関心・意欲・態度」物語や詩を読んで、想像した様子や気持ち

ちが伝わるように、声の出し方を工夫して読もうとしている。

「読むこと」場面の様子や人物の気持ちを想像し、それが表れるように声に出して読んでいる。

「言語についての知識・理解・技能」姿勢や口形に気をつけて、発音・発声をしている。

低学年の教材であり、一学期の最初に配されていたため、一目してわかるごとく、目標と活動は、場面の様子や人物の気持ちを読み取ること、それらを踏まえて正しく音読ができること、などを軸に設定されている。

これらの目標・活動・評価は、現行の『小学校学習指導要領』（平成20年3月告示）だと、第一・二学年のA〈話すこと・聞くこと〉の(1)ウ〈姿勢や口形、声の大きさや速さなどに注意して、はっきりした発音で話すこと〉、およびC〈読むこと〉の(1)ア〈語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読すること〉、イ〈時間的な順序や事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと〉、ウ〈場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むこと〉、さらに〈伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〉の(1)イ〈言葉の特徴やきまりに関する事項〉、ウ〈文字に関する事項〉などと関連づけられることになる。

そして、次に引用する学習の手引きや同単元にある二篇の詩を

みても、そのことは確認されるはずだ。

④ てびき

ようすを おもいうかべながら、声に 出して 読もう

はつきりとした声を出す

○口を 大きく あけて、せすじを のばして 言いましょう。

はつきりと 言えるように、くりかえしましょう。

・アエイウエオアオ

・カケキクケコココ

・赤えんぴつ

黄えんぴつ

青えんぴつ

(「えんぴつ」の かわりに、いろいろな ことばを あ

てはめましょう。)

○おなかから 声を 出しましょう。いろいろな しせいで

声を 出し、どんな 声か 出るか ためしましょう。

⑤ おがわの はる(あおと かいち)

あいうえおがわに はるが きた

かきくけこおりも もう とけて

さしすせそろった つくしんぼ

たちつてとんでる もんしろうちよう

なにぬねのはらの ひばりの こ

はひふへほんとうれしいな

まみむめものかげ めだかの こ

やいゆえよしのめ よけて いく

らりるれるるん うたう みず

わいうえおがわに はるが きた

⑥ たけのこ ぐん(ぶしか えつこ)

たけのこが

ぐん

せのびして

つちをわったよ

あたまに きらり

つゆを のせてる

あさの おほしさんに

もちったのかな

たけのこ のびろ

ぐん

いま仮に④⑤の記号を付したが、てびき(引用④)は(ようすを おもいうかべながら)という箇所を除けば、正しい発声や発音、口形・姿勢など言語技術的な内容に関する比重が高い。二

篇の詩(引用⑥・⑦)も音数のほぼ定まった——⑥は八音・五音の組み合わせ、⑦は主に五音・七音による構成という形で——テンポよく音読できるような作品が選ばれている。

ちなみに、同教科書の本単元に続く章として、言葉の学習(丸、点、かぎをつかおう)——句読点と鉤括弧の用法——が配されていることを付言しておく。

二、作品の表現構造

二・一 内容理解を促すための音読活動

低学年の段階で(言語技術的な要素に重きを置いて)音読に取り組むのは、書かれた言葉・内容の理解を促すことが企図されているからだ。『小学校国語学習指導実践事典』³⁾の指導事項(声に出して読む——語や文のまとまりを考えて読む)に、次のような記載がある(ただし、踏まえられている『学習指導要領』は、平成10年12月告示、平成15年12月一部改正のものである)。

文章の内容を理解するためには、文字を正しくなめらかに音声化し、分かち書きに気をつけて一文節をひとまとまりとして認識し、読点や句点に気をつけて途切れないように音読できなければならない。

はつきりした発音で、「拾い読み」ではなくひとまとまりの語や文として音読できるようにすることは、読むことの最も基本となる指導事項である。

入門期における読みの指導では、特に言語事項(1)アの「発音・発声に関する事項」やウの「表記に関する事項」との関連を図ることが重要である。

指導にあたっては、分かち書きに気をつけながら語としての一まとまりや、「」（読点）や「」（句点）に気をつけながら文としての一まとまりを考えた音読指導をしていく。また、「だれが」「どうした」などの意味を考えたり、「」文には人物の気持ちを込めたりして、声に出して読むようにしたい。

したがって、本章(第二章)では、児童たちを音読活動(表現)に取り組ませることを第一義に想定・設定した上で、そこに物語の内容把握(理解)が伴うよう働きかけることを第二義に据え、作品の表現構造を捉えていきたい。

二・二 擬音語・擬態語と、詞章の反復・並置・列挙

擬音語・擬態語が用いられた箇所、何かが反復されたり並置されたり列挙されている箇所をみておこう。いま仮に(A)～(F)の記号を付し、便宜的に擬音語・擬態語をゴシック体に置換して強調した。また、反復・並置・列挙された詞章には傍線を施した。

(A) とうさんは、大工しごともしようずです。

しゅこしゅこ、のこぎりできって、とんとん、くぎをうつて、りっばな倉庫をつくりました。 [場面①]

③ ぴいすけが、こつちがわにのって、ぷうすけが、あつちがわにのって、

きつこん ぱったん きつこん ぱったん。

シーソーは、かわりばんこに、あがつたり、さがつたり、あがつたり、さがつたり。

④ 「ね、ちよつと、のってみようか」

「のってみようよ」

のねずみたちは、一れつになって、ちよろちよるとシーソーにかけのぼりました。

「いくよー、せーの」

きつこん、とうごくと思つたのに、シーソーはうごきません。いくら力をいれても、とんだりはねたりしても、びくともしません。

⑤ 「のせて、のせて」

「わたしも」

「ほくも」

ちようちよと、みつばちと、てんとうむしがきました。

「のせて、のせて」

とかげと、しゃくとりむしと、かたつむりもきました。 arīも、そろそろ きました。

⑥ 「ようし、もう一回。いくよー、せーの」

きつこん。

うごいた、うごいた。シーソーは、ゆつくりだけど、うごきました。

ぱったん。

「うわーい、おもしろい。もう一回！」

⑦ 春の野原で、小さなおきやくさんをおおぜいのせたシーソーが、のんびりのんびりうごいています。

きつこん ぱったん きつこん ぱったん。

野原のシーソーは、みんなのシーソーです。

擬音語・擬態語とともに、反復・並置・列挙される語や詞章、

あるいは対句的な表現——例えば〈しゅこしゅこ、のこぎりできつ／とんとん、くぎをうって〉とか、〈ぴいすけが、こつちがわにのって／ぷうすけが、あつちがわにのって〉など——が多用されているため、児童たちは音読に際して心地よい言葉のリズムを楽しめるだろう。

ついでながら、引用④の冒頭部（とうさんは、大工しごと、じょうずです）には、前後に明示されぬものの、父猪が上手にこなせる事柄の列挙が含意されている。荒木茂は、〈大工の仕事だけでなく、多分、お料理も、お掃除も、畑仕事も、魚釣りも、ほかの仕事も何でも「じょうずです」なのであって、これに続く描写が〈わりと簡単に、らくに、すぐに、そして上手に、立派に、作り上げてしまったという〉印象を読者に与えると指摘した。⁴⁾

〔場面④〕

〔場面③〕

〔場面②〕

〔場面⑤〕

〔場面④〕

二・一三 動詞〈のる〉、〈うごく〉、〈くる〉と物語展開

ここでは、猪の双子が帰宅した後（場面③以降）の物語進行に
関わる〈のる〉、〈うごく〉、〈くる〉という三つの語（動詞）に着目し、
先の引用①・②・③・④・⑤・⑥をみていきたい。

野鼠の子ども五匹を筆頭に、蝶・蜜蜂・天道虫、さらに蜥蜴・
尺取虫・蝸牛、そして蟻たちがシーソーに参集する。

まず、〈のる〉という語を含む箇所は、場面③「のつてみよう
か」、「のつてみようよ」↓場面④「のせて、のせて」、「わたしも」の
せて」、「ぼくも」のせて」↓「のせて、のせて」という順で現れ
る。

【表一】

場面 語	登場者	のる(乗)	うごく(動)	くる(来)	掛け声	シーソーの音(擬音語)
場面②	びいすけ ぶうすけ	こつちがわにのつて あつちがわにのつて				きつこん ぱったん きつこん ぱったん
場面③	野鼠	「のつてみようか」 「のつてみようよ」	うごきません。 (びくともしません)		「いくよー、せーの」	(きつこん、とうごくと思ったのに)
場面④	蝶 蜜蜂 天道虫 尺取虫 蝸牛	「のせて、のせて」 「わたしも」 「ぼくも」		きました。 きました。		
場面⑤	蟻	「のせて、のせて」	うごいた、うごいた。 うごきました。	きました。	「ようし、もう一回。いくよー、せーの」	きつこん ぱったん
			うごいていきます。		「うわーい、おもしろい。もう一回！」	きつこん ぱったん きつこん ぱったん

続いて、〈うごく〉という語を含む箇所は、場面③「うごくと思っ
たのに、シーソーはうごきません、びくともしません」↓場面④
「うごいた、うごいた。シーソーは、ゆっくりだけど、うごきまし
た」↓場面⑤「シーソーが、のんびりのんびり うごいています」
という順で現れてくる。

さらに、〈くる〉という語を含む箇所は、場面④「ちようちよ
と、みつばちと、てんとうむしがきました」↓「とかけと、しゃ
くとりむしと、かたつむりもきました」↓「ありも、ぞろぞろ
きました」という順で現れていた。

のみならず、これらに付随するかたちで、次のような掛け声も繰

り返し挿入されることになった。こちらは、場面③「いくよー、せーの」↓場面④「よー、もう一回。いくよー、せーの」↓場面⑤「うわーい、おもしろい。もう一回!」という順で(微妙に変型されつつ、反復的に織り込まれていく。



【挿画1】猪の双子と隠れて見つめる野鼠たち

ここまでの記述を一覧化すると、【表1】のようになる。改めて眺めたら、まさに場面③と場面④・⑤(あるいは場面②と場面③)とを分かっポイントとなっているのは、シーソーが(うごく)か否かということであった。結局のところ、野鼠の子どもたちよりも更に小さな生き物たちが集うことで、シーソーは緩やかにではあったものの、動き始めた。

ともあれ、これらの語や詞章、表現をちりばめながら展開してきた物語は、私たち読者へ向け、いかなるメッセージを発しているのだろうか。そのメッセージこそが、とりもなおさず、物語の主題に他ならない。

小学校二年生の児童たちと共に生き活きと音読を繰り返してき

た後ならば、例えば《みんなで仲良く一緒に遊ぶのは、とても楽しいことだ》というのも、ひとつの主題たりうるだろう。あるいは、小学校一年生の教材だった『おおきなかぶ』を想起する向きも多いと思われるが、だとすると、《非力なものが協力し合うことで、大きな力を発揮することができる》という主題が浮かび上がってきそうである。

とはいえ、これらは《並置される別々の主題であって、物語にはいつも複数の主題が存在するものなのだ》ということでは、もちろん、ない。猪の双子たちが野原のシーソーでテンポよく遊んだ後、野鼠をはじめとする小さな生き物たちが参集し、ぎこちないながらも均衡を保ちつつ遊び続けるという本作品に描かれた事象の——そこに纏わり付く物語の登場者たちの行為や心情を加味しつつ、同時に、教室における読者である児童(学習者)たちの発達段階や習熟・到達度を勘案した上で——どの側面を(授業者たる教員が)焦点化するかという問題なのであり、国語科の授業における《物語が発するメッセージの切り口・語り口の差異》に過ぎないのである。

三、作品の物語構造

三・一 擬音語(きっこん ぱったん)と二枚の挿画

前章では、児童たちの音読活動(表現)への取り組みを第一義に想定・設定して作品の表現構造を中心に論じてきた。本章(第

三章)では、前章で第二義に据えた物語の内容把握(理解)へと主軸を移すかたちで、作品の物語構造を論じていきたい。

そこで、まずは前章からの流れを受け、シーソーが交互に動くさまを表す擬音語に着目しつつ——すなわち、表現構造の物語展開への関わりを踏まえながら——本作品の物語が内包するものに迫っていくこととなる。

序章で触れたごとく、ぴいすけとぶうすけは体軀たくや着衣、行動傾向から身体能力に至るまで、非常によく似た双子だった。ゆえに、彼らがシーソー遊びに興ずる場面では、シーソーの、

きつこん ぱったん きつこん ぱったん

という音は、小気味よいほどに一定のリズムを刻みながら繰り返されていたはずである。

それと対照的に、小さな生き物たちがシーソーに乗った場面では、〈きつこん〉と〈ぱったん〉が分離・分割され用いられてい



【挿画2】野鼠たちと小さな生き物たち

る点や、〈ゆつくり〉とか〈のんびりのんびり〉という詞章が織り込まれている点に留意しておく必要がある(引用⑤・⑥)。だから、猪の双子のときと違って、シーソーは、ややテンポのよくない動きをしているわけだ。

音読に取り組む際、このテンポの違いを意識させて読ませることで、猪の双子がシーソーを動かしている場面(引用③)と小さな生き物たちが動かしている場面(引用⑤・⑥)の違いを、児童たちは感じ取ることができるはずである。

なぜそのように音読するのか、という根拠を、物語本文の描写に即して確認するとともに、「場面①」に対応する【挿画1】と【場面④・⑤】に対応する【挿画2】を参照することで視覚的にも理解を促していきたい。ただし、二枚の挿画は同じ尺度で描かれていないので、変倍コピーで両者に描かれたシーソーのサイズを揃えるなど工夫すれば、猪の双子と野鼠たちの身体の大きさの違いを児童たちは看取しうるだろう。

その上で、更に挿画から読み取れる情報について、三井竜彦は児童の反応を拾いながら、次のように述べている。

「ゆつくりなのは軽いからだけかな? 他にもあるよ。挿絵から探してごらん」と指示すると、「トカゲが横に乗っている。早く動かすと危ないからだ」とか「小さな虫たちばかりだから、速く動かすと飛ばされてしまう」などの意見が出てくる。「もつとよく絵を見てごらん」と言うと、この中で

は大きいねずみが他の虫を支えていたり、ねずみに他の虫がつかまっていたりするところが分かる。

実際に【挿画2】をみておこう。シーソー右方の側面には、確かに蜥蜴が張りついている。また、最左端の野鼠が抱えているのが蝸牛で、その蝸牛は前に座る別の野鼠の背中につかまっている。そして、その野鼠の前の天道虫は更に一つ前に座る野鼠の背中につかまっており、その野鼠は自分の前にいる別の天道虫の背を支えているようだ。

〈きつこん ばったん〉の箇所を、児童たちに対照的な速さで読み上げさせる二つの場面。「場面①」には、体軀の均衡の取れた両端の乗り手がテンポよく交互に上下するシーソー遊びの醍醐味があり、だからこそ野鼠の子ともたちは〈うらやましくて、ずっとみていた〉わけであろう。一方、「場面④・⑤」では「ぼくたち、かるすぎるんだ」と、いったん落胆した野鼠の子どもたちに小さな生き物たちを加え、かなりスロー・テンポで動くシーソーの姿が描かれる。前者に比すれば、後者のテンポの悪さが際立つが、その〈ゆっくり〉あるいは〈のんびりのんびり〉には、《両端の重さの均衡を取り合う》という通常のシーソー遊びの要素ばかりでなく、《互いにつかまり合い、支え合う》という小さな生き物たちの思いやりの要素が内包されてもいたのである。

三・二 標題が指し示すもの

次に、本作品の標題が、〈野原のシーソー〉である点に着目しておきたい。引用⑤でみたごとく、この物語の末尾は〈野原のシーソーは、みんなのシーソーです〉という一文で結ばれており、これは同時に、読者へ向けた最も端的で直截的なメッセージにもなっている。

その一文に含まれる二つの〈の〉は、いずれも格助詞の連体修飾格で、前者は(普通に考えれば)場所を示すものであるから、《野原にあるシーソー》の謂となる。一方、後者は所有・所属を示すものゆえ、《みんなの所有するシーソー》の謂である。だとすれば、物語を締めくくる右の一文は、次のような文意だと理解されよう。すなわち、父猪が作った《野原にあるシーソーは、みんなに帰属する(みんなのための)シーソーなので》と。

とはいえ、「場面②」に次のような記述があった。

さいごに木が一本だけありました。

「そうだ、いいものをつくってやろう。」

とうさんは、あまった木で、家のうらの野原にシーソーをつくってくれました。

ぴいすけとふうすけはおおよろこびです。

【場面②】

同場面に至るまでの登場者が父猪と双子の子猪だけである点や、地の文が子猪たちに寄り添った語り口調となっている点、更

に直後に〈おおよるこび〉する子猪たちの姿が描き込まれている点を考え合わせると、父猪がシーソーを作った対象¹¹作¹²てもらった主体は子猪たちだと断じて、異論の余地なきところであろう。

にもかかわらず、〈野原のシーソーは、みんなのシーソー〉であって、《子猪たちのシーソーではない》ことが明示されるのは、なぜか。はたまた、これも引用⑤に含まれていた記述ながら、〈春の野原で、小さなおきやくさんをおおぜいのせたシーソーが、のんびりのんびりうごいています〉という一文の中に、〈おきやくさん〉という単語が織り込まれているのが気になる。

辞書的な語義のうち、この《客》については、〈訪問してくる人〉、〈料金を払って物を買ひ、または見物し、或いは乗り物に乗る人〉（岩波書店『広辞苑』第六版）があてはまるだろう。では、その客の訪問を迎える側、乗り物を供与する側（いわば、もてなす主体）は、いったい誰なのか。翻って、もう一度言うると、〈小さなおきやくさん〉は、いったい誰の客なのか。

例えば、次のような言説でまとめてしまっても、はたして本作品の物語理解として必要かつ十分であろうか。

「場面②」で示されたように、最初の乗り手であったびいすけとぶうすけが（作り手であり、本来の所有者である）父猪からシーソーを贈与されたわけだから、いまそれは《子猪たちのもの》だ。しかし、彼らが帰宅して主不在の状況下、（いわば招

かれざる客である）野鼠の子どもたちはじめ、蝶・蜜蜂・天道虫、蜥蜴・尺取虫・蝸牛、そして蟻たちによって、シーソーの均衡が取られることになった。「場面⑤」に描かれた〈のんびりのんびり〉のシーソー遊びが続く時間、かりそめながらも、シーソーは《小さな生き物たちのもの》になったのである。

結

先の【挿画1・2】をみると、シーソーの背後の左側に、猪親子の住む家が建っている。そのすぐ右手にある黒っぽい建物が、今回作られた倉庫であろう。なお、【挿画1】には、家の前で夕食の支度を終えた母猪が、双子を呼んでいる姿が描き込まれている。その母猪の体軀の大きさから判ずれば、野原に作られたシーソーと猪親子の家との間には、それなりに距離のあることが視認される。

父猪が倉庫を何処に作ったのか、文章によって明示されていない。【挿画1・2】から判断して、おそらく《家の庭》であろう、と言えるばかりである。しかし、だとすれば、そのついでに作ったシーソーも、（息子たちのためであるなら）庭先に作りそうなものだ。

物語の冒頭部において、何を作るのかと双子から問われた際、父猪は、

「あたらしい倉庫をつくるんだよ。いろんなものをしまつて

おけるようにね」

と答えていた。これは、公有地（あるいはみんなの共有地）である山から伐り出してきた沢山の木——いわば自然の恵みを（いろんなものをしまってお）くという私的な用途に使うことの宣言に他なるまい。そして、シーソーを《家の庭》ではなく家から離れた《野原》に作ったのは、必要限度のものを私的な用途に供した後、たとえ余ったのが僅か一本の木であったにせよ、公益に還元することが企図されていたと考えられそうだ。

だとすれば、前章末に掲げた物語理解は、いささかの修正を要するはずである。すなわち、《野原にあるシーソーは、みんなに帰属する（みんなのための）シーソーなのです》という点は動かない。ただし、その所有者（あるいはもてなす主体）を《猪の双子》よりもむしろ、擬人法的にはあるものの《野原》と見做すべきであり、猪の双子もまた（小さなおきやくさん）ともども、野原のシーソーによってもてなされる（おきやくさん）なのであった。

だからこそ、〈野原のシーソーは、みんなのシーソーです〉という終結の語りは、シーソーを介して子どもたちの輪が広がっていくこと——びいすけとぶうすけが野鼠たちをはじめとする小さな生き物たちとやがて出会っていくであろうこと——を予見させるのであり、そんな未来の時間をも内包していたわけである。⁶⁾

※ 『野原のシーソー』の引用は、絵本『びいすけとぶうすけのおはなし』（あかね書房、二〇〇二年）収載本文に拠るが、圏点や傍線等は全て引用者が私に付したものである。

注

- (1) 竹下文子・作、土田義晴・絵『びいすけとぶうすけのおはなし』（あかね書房、二〇〇二年）。
- (2) 学習目標および学習活動などは、東京書籍のウェブサイト（<https://www.tokyo-shoseki.co.jp/>）に公開されていた（平成17年度用・年間指導計画作成資料）を参照。ただし、現在は（平成23年度用）と（平成27年度用）が公開されており、（平成17年度用）を閲覧することはできない。
- (3) 大越和孝監修、藤田慶三・今村久二・井出一雄・邑上裕子編著『小学校 国語学習指導実践事典』（東洋館出版社、二〇〇六年）、二〇二頁・二〇四頁。
- (4) 荒木茂のウェブサイト『音読・朗読・表現よみの学校』（<http://www.16.ocn.ne.jp/~ondoku/>）に公開されている「のはらのシーソー」音読授業をデザインするを参

照。

(5) 三井竜彦のウェブサイト『文学教材の解釈・実践』(<http://homepage3.nifty.com/321mkkgk/>)に公開されている

〈のはらのシーソー〉を参照。

(6) 竹下文子「平成17年度用『新編 新しい国語』掲載教材・のはらのシーソー」(『教室の窓 小学校国語』教科書特集号、東京書籍、二〇〇四年五月)には、作家自身の言葉で〈このお話を、春の教室で、みんなに楽しんでもらえますように。そして、子どもたちがのびのびと夢中になつて遊べる「のはら」が、いつも、いつまでも、心の中にありますように〉と綴られており、子どもたちの心の中にある野原の広がり、が期待されている。

**"Nohara no Seesaw" (written by Fumiko TAKESHITA)
as the educational-material
for Japanese language art education**

Koji SHIRASE

Department of Education and Psychology,

Faculty of Humanities,

Kyushu Women's University

1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

No English abstract